

# どんな時に人は同調するのか？

○藤川真子<sup>1</sup>・#横田晋大<sup>2</sup>・中西大輔<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 広島修道大学大学院人文科学研究科・<sup>2</sup> 広島修道大学健康科学部)

## 研究の目的

曖昧な情報しか獲得できない情報獲得状況で、集団内の多数派が採る行動に、過度に模倣する多数派同調バイアス (Boyd & Richerson, 1985) を示すことは、より正しい情報を獲得するのに有効だと理論上言われている (Kameda & Nakanishi, 2002)。一方, Eriksson & Coultas (2009) では、実際に人が多数派同調バイアスを示さないことが報告されている。だが、彼らの研究では、客観的に正解を定義できない問題 (態度問題) を使用していたという限界があった。多数派が正解している状況では、多数派同調バイアスは正しい情報を得るために役立つと言われている。そのため、客観的に正解を定義できる問題 (客観問題) を用い、多数派同調バイアスを検討する必要がある。

本研究では、先行研究である Eriksson & Coultas (2009) を要因計画と参加者を変更して追試した。本研究では、正解率 50%を超える客観問題で多数派同調バイアスが示されるという仮説 1 を立てた。また、他者の回答が提示される客観問題での参加者の選択は、情報的影響による同調動機に基づくという仮説 2 を立てた。

## 方法

**実験参加者** 4つの実験を実施し、大学生 120名 (男性51名, 女性68名, その他1名;  $M_{age} = 18.93 \pm 1.15$ ), 一般人 183名 (男性76名, 女性106名, その他1名;  $M_{age} = 39.70 \pm 10.14$ ), 大学生 119名 (男性99名, 女性17名, その他3名;  $M_{age} = 18.87 \pm 0.80$ ), 一般人 157名 (男性67名, 女性82名, その他8名;  $M_{age} = 38.45 \pm 10.00$ ) を分析対象とした。

**実験手続き** Web上で、まず、他者の回答が提示されない状況で客観及び態度問題に2択 (はいいいえ) で回答を求めた (個人回答)。次に、正解/支持した人数の割合 (100.00, 66.7, 33.3, 0.00%) を操作した架空の他者の回答を提示し、同じ問題に回答した (実験1と2: 参加者内; 実験3と4: 参加者間)。最後に、同調志向尺度への回答を5件法で求めた。

**質問項目** 正解/支持率が50%を超えた客観 (14項目) 及び態度 (5項目) 問題を用いた (客観: イチゴはヘタに近い部分が最も甘い; 態度: ハトは病気を広める)。

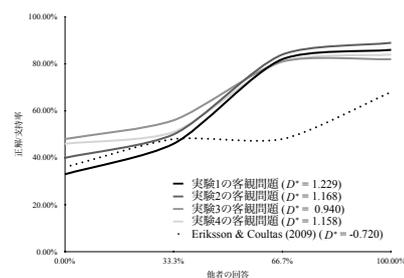
同調志向尺度 (横田・中西, 2011) は規範的及び情報的影響に関する項目を用いた。

## 結果

**仮説1の検証** 先行研究に従い、他者の回答に対する正解率をプロットし、多数派同調バイアスのパターン (S字型) が示された (Fig. 1)。また、バイアスを数値的に表す指標でも多数派同調バイアスが示された (Fig. 1: 正の  $D^*$ )。よって、仮説1が支持された。態度問題は、実験1と2では多数派同調バイアスが示され、3と4では示されないという結果であった。

Figure 1

多数派同調バイアスの検討 (実験1-4)



**仮説2の検証** 客観問題の同調得点 (個人の多数派同調傾向) と情報的影響得点 (実験1-4:  $.60 < r_s < .69$ ) の相関分析を行った。実験4 ( $r = .15, ns.$ ) 以外で、有意な正の相関がみられ、仮説2が支持された (実験1-3:  $.25 < r_s < .37, p < .05$ )。

## 考察

正解率 50%を超える客観問題で多数派同調バイアスが示された。特に、正誤判断に迷う客観問題 (個人回答の正解率 50%近辺) でバイアスが示された。また、実験4を除き、客観問題の同調得点と情報的影響得点との間に有意な正の相関がみられたことから、他者の回答が提示された状況下での参加者の選択行動は情報的影響による同調行動であることが示唆された。ただし、本研究は場面想定法を用いた実験であり、正しい回答に金銭的報酬を加えた場合にも同様の結果が得られるかどうかは明らかではない。今後、行動実験での検討が必要である。

## 謝辞

徳岡大先生 (人間環境大学) に分析に関する助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。